
里帰り

宇都宮 古穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

里帰り

【Nコード】

N9180B

【作者名】

宇都宮 古穂

【あらすじ】

亡き父の想い。それは、故郷に帰る事。しかし、帰れぬ事情があった。本当の事は、知らない息子ではあるが、父の気持ちを想って、里帰りを果たす。母と娘もそれぞれの想いがあること。

第1章

外はよく晴れた雲が薄く流れるように青白い空、春の午後。

桜の花も幾分か散り始め、やっと好きな春らしい季節が訪れた。

少し桜散り行く頃、舞い散る桜に包まれ、ほんのり淋しさが感じられる。

青白い空の漂う空気とは違う、少し指先がこわばる程の寒々としたこの部屋。

薄明かりの部屋の壁には、旧家の風格らしく先祖の写真が隙間なく並んで吊ってある。

茶色に変色し、少し埃を被った様は、長々とそこから、家族を見下ろす役目で時間と共に居座ってる。

敷き詰められた畳も所々波打つへこみがあり、歩くと少しきしむ。多分、畳下の床が湿気に侵されてるのだろう。

飴色より少し鈍く黒ずんだ柱は、幾重にも連なる小さな傷も時間の流れを感じる。

僕は、後ろを振り返りながら誰も見ていないか目配りをし、分厚く大きな刺繡ししゅうのしてある座布団へゆっくりと腰を下ろした。

仏壇の前には、袋に入った砂糖菓子がお供えされている。多分それは父が子供の頃、お婆ちゃんからおやつ代わりに貰った砂糖菓子だと思う。

僕は、父の生まれ育った家で一緒に暮らした訳じゃない。それでも、この家はとても久しく、懐かしく感じられる。

仏壇のロウソクに火を灯し、仏壇の隅に置いてある箱から2本ほどの線香を手でつまみ、ロウソクに翳かざした。

なかなか火の点かない線香をぼんやり見ながら、左手で背広の右内ポケットに忍ばせておいた一枚の写真を取り出した。

火の点いた線香を軽く息で吹き消し、仏壇に供えた。本当は、火を手でかき消せば良かったかな。

手に持った写真は少し折れ曲がっていた。そのまま、ポケットへ無造作に入れて持ち歩いていたから仕方ないだろう。

左手で擦るように伸ばして、曾じいちゃんいはいの位牌の横に寄り添う様にそっと並べて置いた。

両手をゆっくりと合わせ、拝むと言うより、おでこを押し出すような姿勢で軽くうつむいた。

顔を上げ、写真に目を呉れた。軽く握った右手のこぶしをそっと右胸にあて、喉の奥まった場所から呟きみたいに、声のない声で語る。

お父さん。

やっとここに帰って来れたね。

ここに帰って来たかったでしょ。

今はやっと、ほっとしてるかな。

ここに来るまでに10年かかったよ。

今、うれしいよ。こうしてお父さんの気持ちを運んで来れたのだから…。

一枚の写真だけど、ここに供えると父の里帰りで僕も帰って来たかのように思える。

今までの事、これからの事もすべて。

それから、今日の知恵の結婚式、とっても良かった。

お父さんに見てほしくて、新郎の重雄君と知恵はここで式を挙げた。二人は亡き父を偲しのぶまでの事らしい。

とにかく、幸せな知恵の顔だった。今までにないくらいの悲しくも、うれしく泣いた顔を…。

木々の間をぬって、春のやわらかな木漏れ日が、二人の結婚式を包んだ。とても気持ちいい風が桜の木々を揺らし、二人へ花びらが舞っていた。

僕の目に映った二人、きつと忘れられない。この日のことを…。
お父さんにも見せたあげたかった…。いや、見てるはず。知恵の
事を…。

「……………」

父は、九州の片田舎、農家の次男としてこの家に生まれた。

兄と弟との3人兄弟、祖父母も同居しており、旧家の7人家族で幼
少の時期をここで過ごした。

田舎なので小・中学校も少なく、高等学校へは家から遠く、毎日、
国鉄で2時間程かけて通学していた。

自慢は、遅刻や休んだ事は一度もない事。以前、僕が病気をして、
よく休んだ時、父本人から聞かされた事がある。

高等学校を卒業後、東京の電気会社に就職。そしてある時期を境
に自己退職。でもって、母方の故郷へと移り住んだ。

僕と妹の二人だけが唯一の子供である。最初の子供は結婚して直ぐ
恵まれたが、この世を見ぬままだったらしい。

だから、本当は兄だか？姉だか？僕達兄妹には、もう一人居たのか
もしれない。

その父の出産は叔父さん達と違っていた。

横の納戸部屋でお父さんは産れたと。以前、お婆ちゃんに聞いたよ。
もう40年前にもなる。

生まれる時、産婆さんが間に合わなかったらしい。

なんで、待てなかったのかな。いつもせっかちで、人の話を「
はいはい」って言って、よう聞かんかった。

思い込みも激しく、いつも早合点で、自分を持って生きてた人だっ
たな…。それでいて、語らず、人のことを気にかける。

生まれる時がそうだから、それが性分なんだろう、きつと。その
時代は、おじいちゃん。まあ、お父さんになる主人が自転車あるじやら、
單車やらで産婆さんを迎えに行ったらしい。

だから、出産は大半が家だったらしく、大きなタライに熱いお湯を入れ、清潔な布を準備し、産婆さんの指示で主人が右往左往して、この世に生を与えられていた。とにかく、出産は、昔も今も大行事である。父も同様であったはず…。

そんな最中、父が生まれた時期は農繁期で人手がない。おじいちゃんや産婆さんを迎えに行くのに手間取って、そんな甲斐も無く、この家の納戸で産声を上げた。それは、産婆さんまだ到着する前だった。産婆さんは、へその緒を切って終わりだったらしい。

人と少し違った始まりの人生。生まれ持った運命だったのかのうちに、何事も一人で生き抜いてきた父が、家族を持ち、幸せな人並の人生を送ると思っていたはず…。

その本人がこの世に産んでくれた母より先に逝ってしまった。

12年前だった。父の肺がんが発覚したのが。それから先は、あつけない程早かった。

定期健康診断で右胸に影らしき。再検査の通知を貰い、父は家族へ気にかかったような素振りも見せず、病院で検査を受けた。

結果はやはり、右胸部の肺がんと診断。幸いに初期症状だから、大丈夫と医者からの言葉。

その後の精密検査で早い時期に胸部切開手術に至った。

しかし、その後も3度の手術を繰り返し、薬餌療法、そして漢方治療と。無駄に思えるような治療を父は黙って頑張っていた。元々、昔ながらの人だったので、騒ぐわけでもない。多分、自分の先が僅かだと分かっていたんだと思う。

3度目の手術後から、1年半の闘病生活。

病院と自宅の行き来を繰り返した後、父はそのまま病院で帰らない人となった。享年40歳と僅かだった。

僕は中学校に上がったばかりで、妹の知恵はまだ小学校の1年生だった。

母は手術を受ける時から分かっていた。当然、担当医師からの宣告

を受けていたはずだから。本人へ隠して話さずの時代だった。それを誰にも言えず、胸に抱えたままで一番辛かったのかも知れない。

母の嘘笑い、子供ながらに解った。
入院中から、僕達兄妹にいつも心配ないと言う母の目はいつも薄らながらに、滲^{にじ}んでいた。

最期の時、母は両手で顔を覆い、嗚咽^{おえつ}を吐きながら、咽^{むせ}び泣いていた。

妹の知恵は幼かった。死を理解できておらず、亡き父を見て、幼い言葉で問いかけていた。

「お父ちゃん！ お父ちゃん！ 死んだんね！」

「ねえ…、お兄ちゃん！ お父ちゃん、死んだんね！」

父の亡き姿より、知恵の言葉で僕は、辛くて泣いた。

嗚咽^{おえつ}を吐いた、あの日の出来事。父が亡くなったあの時。

蒸し暑い真夏、鈍色^{にびいろ}に染まった空が僕達家族を見下ろしていた。

第1章（後書き）

誰かが、自分の想いを悟ってくれる。

家族でなくても、相手に真直ぐに向き合うと気持ちは少しだけど、何か解るのかもしれない。

そんな事を伝えたい。代わりにしたあげることがあると思う。そんな事を表現したかったです。

第2章

父が病院の床に伏せた頃からだった。田舎訛^{いなかなま}りを多く使うようになった。所々、言葉に詰りながらも無理にでも使おうとした。それは、亡くなる少し前まで使っていた。その頃の声は、喉の奥からがらがらで、言葉にはならないほどの声であった。

多分、精一杯の息継ぎしながらの声だったと思う。

それでも、僕に顔を向けながら、出ない声で話しかけてきた。僕達家族に自分の生まれた田舎の事、子供から大人になり、家族と共に暮らした事を振り返るように…。

気持ちが高ぶったり、何かあると田舎訛^{いなかなま}りになっていたと思う。

あの時も同じだった。僕と筏釣^{いかだつ}りに行った時だったと思う。父は方言丸出しで浮かれていた。多分、嬉しかったのだろう。いつもは一人で行く釣りであったが、その時だけは僕を誘って出かけた。

「おーい」

「健治——」

「引いちよるぞ」「針を持ってかれるんぞ」

「早く、合わせ——、餌^{えさ}とられるんぞ」

「…え」

僕は、遠くの船に氣をとられていて、浮きが引き込まれてるのに気づかなかった。

目線を浮きの方へやるが、何処にあるのか見当つかんかった。とにかく「えい！」と竿を立てた。しなる竿の先からガツーンとした手応えが伝わってきた。

「健治、これは、でかいぞ、きっと大物だ」

父ちゃんの方が慌ててしまい、手に持っていた竿を放り投げた。片手に大きな網を持ち、僕の方へ慌ててると言った方が良いのか。よろけると言った方がいいのか。とにかく歩み寄って来た。

「もう、しっかりのつちよるき」

「釣り糸を切られんようにせんと――」

「あわつーなよ」僕の横に立ち、耳元に響く大きな声を発した。

「…うん、わかった」

リールに巻いた2号もある釣り糸が切れそうで、手に汗が滲んだ。
ぎりぎりとしリールを巻いた。とにかく巻いた。

そして、目の前に現れた魚体は、銀色の体を光らせて最期まで抵抗していた。

「…父ちゃん たも、早く、たも」

「おー、そーやった」

「健治、あわつーなよ」

「…どっちが」

僕じゃなく、父ちゃんの方が興奮してる。やっとの思いで、銀色の魚は、父ちゃんの構えた網に収まった。

咥えた針を外しながら、「やったの――、50cmは超えちよるぞ、刺身が取れるぞ」

「…父ちゃん、これなんてー魚ね」

「ん、これか、こん魚は、鰯や」

「…えー、鰯やったらいらーん」

僕は、以前、テレビの釣り番組で見た釣り人が、鰯を海に放っていたのを思い出した。

きつと、不味い魚だから、放っていたのだと思い込んでいた。

「バカいえ、鰯でも沖鰯だったら、おいしんど。刺身、酢味噌を着けて食べると旨いんや、知らんのか」

「…知つとう、いー、僕、食べん」

「…逃がす」

「何言ようんか、早よ、絞めてからクーラーボックス入れんと」

そう言い終らぬまま、父ちゃんは、ジープンのポケットからナイフを取り出して、鰯の目の上辺りにグイとねじ込んだ。

今まで、元気に尾びれをバタつかせていた鰯は痙攣した後、急に力

尽きて父ちゃんの腕の中でピクリともしなくなっていた。
そのまま、クーラーボックスに滑るように放り込んだ。

少し夕日が沈みかけた時間まで粘ったが、鰯ぼらを釣った以後、僕も父ちゃんもさっぱりだった。

一日、いや一ヶ月分位の運を使ってしまったみたいで、当分釣りはさっぱりな気がしていた。

「健治、帰るか、早よー帰って、釣った鰯ぼらをさばいて一杯や」

「…ん」

もう少し、もうチョツとやったら、釣れそうやけど…。と思いながら、

「…そうやね、母ちゃんも知恵も待っちゃようけん、帰ろ」

秋の夕暮れの時は早く、暗くなる筏いかだの上で道具を片付けた。

父ちゃんは、焦る気持ちを抑えながらもハンドルを切り、緩やかなカーブを走り抜けてた。

きっと、鰯ぼらの刺身で一杯やりたい気持ちでいただろう。僕は、横目で父ちゃんを見ながら、揺れる車で眠くなっていた……。

第3章

あの時に筏釣りに父と行った事を思い出しながら、写真を見ていた。

「健治」

「…うん」

背中の方から声をかけてきたのは、母だった。

「ここに居たんね」

「…うん、いや…」

リュウマチに悩まされた左足を労わりながら、ゆっくりと歩み寄ってきた。

まだ若かった母は、父が亡くなってから人一倍働き、僕達兄妹を育て上げた。

住んでいたアパートが漁港に近かったせいもあるが、それに関わる生業で生計を賄っていた。

無理が祟った事もあり、関節炎を早くから患い、ここ数年前から酷くなっている。寒さが緩む季節になっても、まだ辛さを引きずるらしい。

その左足を伸ばしたまま、僕の左肩に母の手が掛かった。

僕は、母の右手の甲を包むように押えて、肩に力をいれた。母は、ゆっくりと腰を下ろした。

すぐさま、仏壇の父の写真に気づいた。

「それ、お父さんの写真だね」

「…うん、そう」

「あんたが供えたの」

父は、なかなか写真を撮らせてくれなかった。それは、母も知っている。

僕達兄妹の写真やビデオは沢山ある。自分の写真やビデオを撮らせる事は、なかなかさせてくれなかった。

「：結構良く撮れてるし、いい写真だね」

「そうね：」

「この写真、お父さんが単車に跨またがってる時のだよ」

「そうだね、ご自慢の単車だったからね」

「僕は、オンボロでエンジンのかかりが悪い事しか覚えてないよ」

「それでも、あの単車があったから、うちは助かったもんよ」

「あんたは、よく熱出したしねー」

「しょっちゅう、お父さんの背中に負おぶさって、単車で病院へ行っ

たもんよ」

「：：そうかな」

幾度かは覚えてはいるけど、素直に肯うなずけなかった。いつもの事だったから

「そうよ、風邪引くと直ぐに熱を出すから、いつも冷凍庫のアイスノンを欠かさんかったんよ」

そう、小学校に上がる頃の事。単車の乗り心地も悪かった事。よく覚えてる

僕は小さい頃体が弱く、熱をよく出した。病院へもよく行った。

あの時も、単車のハンドルを握る父の背中で僕は呻うなっていた。

学校から帰って来て、気分が悪いのを母ちゃんに伝えた。

「熱あるんじゃない、横になってなさい 体温計もって来るからね」

「：：」

母ちゃんは体温計を持ってくるなり、内輪うちわを仰ぐような仕草で強く何度も振りかぶった。

水銀のメモリが下がったのを見て、僕のシャツをたくし上げ、冷たい体温計を左脇に挟み込んだ。

「：ひっ 冷たいよ」

「ちよっと我慢してね」

「：：」

体温計の銀色の水銀がメモリを徐々に上がっていく。見なくても

分かった。自分でも熱が高そうだと感じていた。

39・5度のところ辺りでメモリの動きが遅くなった。体温計を見ていた母ちゃんは、びっくりした。

「まあ、39・7度もあるよ」

「厚着して、熱を出そうね、はい、水分摂ろうね」

僕は、母ちゃんの言う通りに畳の部屋に敷かれた布団に寝かされた。

染みの浮いた天井の節が歪んで見えた。蛍光灯もぐるぐるしていた。きつと、熱のせいだろう。

瞼を閉じると目の奥のほうからぐるぐる回って、きつくてそのまま寝てしまった。

「健治、はい、白湯と薬よ、飲める」

「…」

頭の奥の方から、起こされた。母ちゃんの声が遠くで聞こえているようで。

僕は、ぼーっとして少し起きれた。

「…」

それでも、眠くておぼろげだった。

「健治、父ちゃんが病院に連れて行くよ、起きて」

もう一度、母ちゃんの声でようやく重たい瞼を持ち上げた。

部屋は薄暗くて、窓をカタカタと風が叩いていた。

どのくらい寝ただろう。いつの間にか眠り込んでいた。

声の聞こえる方に顔を向けると父ちゃんも横に座っていた。

「着替えるんで、父ちゃんが背負って病院へ連れて行くきね」

僕の汗かいた肌着を、母はすぐさま取り替えた。

着替え終えた僕に父ちゃんは背を向け、背中に凭れる。そんな状態で僕が乗っかかるのを待っていた。

黙って、僕は父ちゃんの両肩へ両腕を回し、首を抱え込むように体を預けた。

父ちゃんは僕の両足のもを挟み込むようにし、ゆっくりと起き上がった。

母ちゃんがおんぶ用の紐ひもで、僕を父ちゃんを縛り、しっかり固定した。たんぜん

丹前をかぶって、更に寒さをしのぐようにした。

その頃、まだ父ちゃんは、車を持ってなかった。免許は持っていたが、車を買うまでの生活に余裕がなかった。

その單車も125ccのオートバイだった。父ちゃんは、いつも單車で仕事へ行っていた。

「そいじゃ、母ちゃん、行って来るきね」

「あ、そうや保健証と少しお金をくれ」

妹の知恵は、母ちゃんの後ろに回り、エプロンの端を握ってこっちを見ている。

父は手際よく身支度を済ませ、玄関の戸を開けた。外は、更に暗くなって風も強く感じられた。

向かい風を受けながら走る單車、父ちゃんは寒かったはず。両肩の力が入り、僕の両腕を持ち上げるような感じだった。

僕は、熱があったせいかな、以外と風が気持ちよかった。

20分くらい風の中を走っただろうか。

「健治、しっかりせーよ、もうじき、着くきな」

「……父ちゃん」

「何や、大丈夫か」

「……い、痛いよ」

「もう、病院は直ぐそこやきな」

「……てて」

ごろごろ石の砂利道。病院へ向かう道はまだ、アスファルト道路じゃない。

單車のハンドルを取られながらもお構いなしにぶっ飛ばしていた。風邪のきつきより、体を縛っていた紐が食い込んで痛かった。

父ちゃんは、勘違いをしていたんだろうな。
それでも、僕は、父ちゃんにしがみついていた。大きな背中に…。

第4章

「ほい、健治」

「…うん」

「これ、そこに一緒に供えておいといて」

「あんたに先に越されたからね…」

母は、そう言って、小脇から丸い筒状の缶を取り出し、僕の方へと差し出した。

愛煙家の父が好んだ煙草、『缶ピー』。

それは缶で作られた容器に50本ほど納まった両切り煙草である。缶の底に触れた時、ザラつきを感じた。錆が纏わりついて^{まと}いた。

「…これ、お父さんの？」

「父さんが最期に封を切った缶ピースだよ」

缶の中は、まだ半分以上も残っていた。

「…どうして、それを」

「父さん、健康診断の再検査を受ける時に、そのまま置いていったんよ」

「お父さん、そのままだったんだね」

そう呟きながら僕は、父の『缶ピー』も写真横に置いた。

「父さん、ここで吸うね」

「…なんでそう思う」

「お母さんには、分かるんよ」

「父さんと何年一緒だったかしってるん」

母は、そう言って父の写真に眼差しを向けた。

父が亡くなってからの時間の方が一緒にいた時を上回ってるはず。それでも、父のことを深く理解していた。

「ここに帰ってきたんだし、健治にも本当の事を…」

母は、何故か父の退職の事を話し始めた。僕の知らない父の事を。

同僚をかばったの事だった。横領した会社の同僚を庇^{かば}った。

後にして分かった事らしい。父の1年忌の時、その同僚だった方が線香を上げに訪れた。そして、母に頭を深々と下げ、事の真相を伝えた。

子供の高額な医療費を払うために必要だったらしい。貯金を切り崩し、親戚からの援助、最期は消費者金融からの借り入れ。

頑張って返済したが、膨らむばかりの借金。そこまで追い込まれてしまい、会社のお金に手をつけた。経理部に所属していたという事もあって、手を汚してしまった。

金額は、さほど高額ではなかった。その頃、不審に思った父は、その事を知りつつも見えて見ぬ振りをした。以前から、事情を知っていた。かばった訳ではない。

すぐさま、お金は戻されたが、父は自分の気持ちが許せなかった。母にも語らず、それなりの理由付けとし会社を後にした。負い目もあったせい、故郷に戻らず、家族一家で母の故郷へ移住した。母も深く問いたださなかった。それなりの理由^{わけ}があると信じた。

幸いその時点では、会社には分からなかった。しかし、監査が入れば分かる。

退職時に同僚との間で交わされた言葉が、

「おれも、悪かった、早く、お前を救うべきだった」

その同僚も口を閉ざしていたが、良心の呵責^{かしやく}に耐え切れず、その事を会社へ事の真相を伝え、退職した。

風の便りで父の死去を知った。いつか話しておくべきと判断しての事だった。

その方への憎しみはない。そう言ったら嘘かもしれない。母は、父の決断を否定しなかったし、全てを受け入れてたから。

技術職だった父は退職後、母方の知人の紹介で小さな電気会社で働いていた。

東京での生活とは、全然違っていった時間の流れ。ゆっくりと流れて

いた。そこでは、誰も知らない過去の事。

それ以後、語らなかつたおじいちゃんと父。親子の会話を僕は見た事は無いままだった。

おばあちゃんは、時々僕達に連絡をしてきた。おじいちゃんに見つかからないように。何か父へ話をしていたと思う。それは、僕達子供にとって知り得ぬものだったと今思う。

「父さん、色々言わんかったやろ」

「…うん」

「父さん、ここに帰ってたんよ」

「本当は、おじいちゃんとゆっくりと話したかったんよ」

「このままでいいね」

「今日は、父さんの里帰りと知恵の結婚記念日とめでたい事」

「…そうだね」

「…お母さん、お父さん喜んでるよ、きつとね…」

涙混じりで言葉で呟いた。

「健治、泣いてるんね」

「…んん」

僕は、俯いて、母の言葉を跳ね除けるように、かぶりを振った。

口を閉ざして呻くように、やっぱ僕は泣けてきた。

涙を堪えながら、母の方へ眼差しを向けると壁に並んだ先祖の写真を見上げてる。僕に見られないようにしてる。涙がわいて、零れ落ちるのを押えきれない事を。

母は、仏壇に振り向き、ゆっくり目を瞑って、閉じた目から更にいっぱい涙を溢れている。

そして両手を合わせ、今度は深々と頭を下げていた。僕は、線香をひとつか一掴みし、ロウソクで火を灯す。線香の消え行く火と流れる煙が入れ替わる。

明日からは、ここに父が居る。折れ曲がった写真じゃ、おじい

ちゃんと仲直りできそうもない。堂々とした写真を壁に吊りかけようと思う。

そして今、父の生きてきた人生の時間を僕は越えた。今なら、あの時の父の気持ちがかかるような気がする。

いつか僕が亡くなった時、自分の息子は何を考えるだろう？何を思っ
て手を合わせるだろうか。

ロウソクが揺れている。部屋の襖が薄く開いていた。

その隙間から流れ込んでくる風は、まだ少し冷たい春の夕暮れに混ざった空気を運んでる。

縁側のサッシから部屋に差し込む日差しは、オレンジ色の弱い夕陽となりこの部屋を包み込んでいた。

時折、父の写真を揺らすロウソクが靡なびいていた。母の横顔をも揺らす。そして、僕の心も揺らす。

生まれた場所に戻りたくなる気持ちは、誰しも思うこと。僕も、生まれた場所に何時かは戻るだろう。

きつと…。そんな時が来るだろう。きつと…。

第4章（後書き）

ありがとうございました。

最後を書き終えて良かったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9180b/>

里帰り

2010年10月9日02時22分発行